



私たちは今日までの歩みに誇りをもって地域社会・利用者・職員
のしあわせを次の半世紀につないでいきます

ヨハネによる福音書13章
「イエス弟子の足を洗う」

SENZOKU vol.34

洗足



日本聖書協会発行「アートバイブル」より

13章 8節：ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられた。



神戸光生園
モルックで遊ぶ

フィンランドのスポーツ



CONTENTS

1. 巻頭言 P.1
2. 創業50年への足跡③ P.2
3. 能登半島地震における法人支援活動について P.3・P.4
4. 新任理事のご紹介 P.5
5. 創業50周年記念に向けて「感謝と希望」 P.6
6. 2023年度事業報告 P.7・P.8
7. 2023年度決算報告 P.9・P.10
8. 法人第5期中期計画「2024年度」計画について P.11・P.12
9. Tunagariこどもひろば P.13
10. 新施設長・課長紹介 P.14
11. 牧師メッセージ P.15

社会福祉法人 神戸聖隷福祉事業団

〒654-0142 兵庫県神戸市須磨区友が丘1-1 TEL:078-792-7555 FAX:078-795-4511

<https://www.kobeseirei.or.jp>

父の愛唱歌

理事長 水野 雄二



私事で恐縮ですが、父が亡くなって今年で丁度20年を迎えました。20年前の葬儀の時、父に愛唱讃美歌があることを初めて知ったのですが、それはキリスト教会ではよく知られた歌で「真実に清く生きたい」（讃美歌21 520番）でした。葬儀でも歌われたこの歌は、青少年教育に携わった父には相応しい曲だったと思われま。その歌詞の1番は、このように綴られています。

「真実に 清く生きたい、誠実な友のために。

恐れず 強くありたい、なすべきわざのために。」

この詞はハワード・ウォルターというアメリカ人が1906年頃、早稲田大学の教員として来日中に日本で記したとされています。彼にとっては外国である日本人の友や学生のために作った詩でしょう。ハワードは日本での仕事を終えた後、独立前のインドで青年のために酷暑と貧しさの中で働き、そして病を得、35歳の若さで病没しました。彼が謳う「なすべきわざのために」とは何でしょうか？ それはこの歌の2番の歌詞にある「友なき人の友と」なること、「報い求めぬまことの愛の人」になることではないでしょうか？ 彼はそれを日本で、そしてインドで実践しました。

私の父も若い日々は太平洋戦争と共にあり、戦争終結直前に徴兵され、中国満州で敗戦に遭遇。直後にソ連軍（現ロシア軍）によってシベリアに送られ、3年間を極寒の強制収容所で過ごしています。人間が人間でなくなる戦争を体験し、幸いにも帰国した戦後の日本で、「真実に清く生きたい」と謳うこの讃美歌に共感し、青少年のために働きました。

ハワードは3番の歌詞に「弱さを自覚しつつ、謙虚に進みゆきたい」と書きました。今を生きる私たちも福祉の業務を通して、たくさんの人に出会いますが、その中には弱さを抱えて生きる多くの方々がおられます。私たちもハワード・ウォルターと同様に自らの弱さを自覚しつつ出会う方々と共に謙虚に進んでいきたいと思ひます。

今、福祉の世界は厳しい経営環境にあり、施設運営も事業の多様化、人材確保の困難さなど多くの課題がありますが、それでも「友なき人の友と」なり、一人一人の幸福に繋がる「報いを求めない愛」の業でありたいと願ひます。

父の愛唱歌は今、私の愛唱歌となっています。

1983年12月に浜松の聖隷福祉事業団から分離独立した神戸聖隷福祉事業団は、その後、特に神戸地区において、新しい施設を次々と誕生させていきます。1984年の「神戸友生園」、1985年の「神戸光生園」、そして、1987年に「自立の家しもはた」、1988年に「自立の家せきもり」、1990年には「自立の家おおまち」の開設と続きました。特に神戸地区においては知的障害者の通所施設の重要な役割として、生活支援を通じた社会的自立があるとされ、「家庭内自立」を目標に、本体施設の他に10人規模の作業所が次々と誕生することになりました。一方、重度知的障害者の「親亡き後」の課題を受け取り、神戸聖隷の役割を更に一層深化させるために「神戸明生園」の開設が図られ、1991年、神戸しあわせの村内に開所しました。

神戸明生園開設が準備されている少し前から、和田山地区における高齢者施設の開設が議論され、デイサービス「さくらの苑」（1988年開設）に続いて、特別養護老人ホーム建設の計画策定に至りました。周辺での他団体の施設整備が進む中、神戸聖隷でも取り組んでほしいとの声に応えようとするものでした。そうして、1991年に特別養護老人ホーム「平生園」の開園となり、神戸聖隷として念願の高齢者福祉が本格的に始まりました。ここに記憶されるべきことは、開設資金確保のために、地域に支援を依頼し、和田山町内4000世帯から5000万円を超す浄財が寄せられたことで、地域と共に生きる法人としての決意を新たにされた出来事でした。



当時の法人リーダーシップは金附洋一郎専務理事。金附専務は1992年に第2代理事長に就任し、法人経営をリードすると共に、地域にあつては同業団体の会長としての貢献が顕著でした。1990年代、金附理事長のリードの下で、潜在的な経営資源を磨き、社会的にも大きな信頼と役割が与えられた時代となり、その成果はその後の発展に引き継がれていきます。

そして、法人として充実した90年代半ばに差し掛かった1995年1月17日、神戸は未曾有の大震災に見舞われたのです。丁度、法人が創業20周年を迎える年、神戸地区の各施設は早朝の激震に襲われました。幸いにもご利用者、職員全員の安否が確認され、各施設も断層帯から外れていたため被害は軽微でしたが、残念にも須磨の「せきもり分場」が全壊しました。経験したことのない事態に救援物資やトイレ用水12トンが和田山施設から搬送され、大災害に直面した際の協力体制が現在のBCP（事業継続計画）のない時代においても大いに発揮された出来事となりました。



歴史を語る③

加藤 成久さん

（現神戸聖生園施設長、1995年1月神戸明生園主任の時、阪神淡路大震災を経験しました。）



加藤成久さん

その時、神戸明生園は一般の避難所で暮らすことのできない人の避難所になりました。10家族くらいが半年間ほど入所されました。丁度、神戸明生園が50人から80人に定員を増やすタイミングと重なり、施設の中は大混乱。工事はおろか、準備していた全部を考え直す必要がありました。神戸明生園のすべての部屋に人が溢れる状況になりましたが、全国から同じ福祉の仲間が日替わりで夜勤のために来てくださってその数ヶ月を乗り切れたのです。一晩中わっさわっさと手に負えない状況でしたが、駆けつけてくださったボランティア職員らは夜勤だけでなく、昼間も地方の郷土料理を振る舞ってくれたのです。長野の施設職員は「おやき」を作ってくれました。その時の印象がものすごく強く、「ボランティア元年」とか後になって言われましたが、その時の思いが蘇ってきます。「ああ、助けられた（救われた）」という思いですね。その時代は大災害の際にどう対応するか準備は不十分でしたが、今は随分整えられました。その意味で阪神淡路大震災はエポックになりました。これらの体験が、その後の東日本大震災の時、救援への思いを奮い立たせたと強く感じています。災害は繰り返されます。とても辛い思いもありますが、経験値が重ねられて、より良い支援に繋がっていくのだと思います。その意味でも経験は語り継がれなければなりません。

能登半島地震における法人支援活動について

1995年の阪神・淡路大震災、そして2004年の台風第23号による土石流被害を経験した法人として、私たちは能登の人々に思いを馳せ、可能な支援を行っていきたく考えています。この度は、要支援者が避難されている「1.5次避難所」への職員派遣と緊急募金についてご報告いたします。

🎧 呼ばれる声に耳をすませて 🎧

【能登半島地震 被災地支援報告】

恵生園 生活支援主任 田治米 孝宏



2024年1月1日。

夕闇迫ろうとする時刻、石川県能登半島沖を震源とする『令和6年能登半島地震』が発生しました。

その時私は兵庫県朝来市にある恵生園で勤務しており、頑丈な建物でも足元が何度もユサユサと揺れました。

震源域である石川県では、年明けの喜びもつかの間、巨大な地震のエネルギーにより土砂災害、地盤の隆起、液化現象、家屋の倒壊、火災等に起因して、大切な命が奪われ多くの方が被災されました。能登半島を中心に生活のインフラを始め、道路の寸断が発生し数多くの自宅生活困難となられた方達が各地域での1次避難施設に集われ急場をしのがれました。しかし、救援物資が十分に届かない所もあり厳寒期でもある事から、より安全で安心できる2次避難場所が設定され移動が始まりました。そんな中、肢体不自由な方、介護が必要な方、乳幼児、福祉施設や病院におられる方など、生活支援や身体介護が必要な方の2次避難場所への受け入れ先選定に時間を要する状況でありました。そこで、災害史上初の『1.5次避難所』が小松市と金沢市の計3ヶ所に開設され、支援や介護が必要な方の一時的な避難所となりました。しかし、被災地で何とか施設運営を続けている施設と同様に、人員の不足が生じていました。厚生労働省福祉基盤局から当法人を通じて社会福祉施設等に対する介護職員の派遣依頼を受け、金沢駅から車で約30分の場所にある1.5次避難場所の『いしかわスポーツ総合センター』で2月2日から8日間、計5回の夜間任務に就きました。任務内容は主に感染症等に罹患された介護が必要な方々の支援で、大まかな流れは次の通りです。

19:30	19:45	20:00	21:00	22:00	24:00～4:00	6:00	7:30	7:45	8:00
・ QRコードを利用した支援者登録	・ 全体申し送り ・ 連絡事項確認	・ 要観察者バイタル確認 ・ 翌朝分配薬準備・本日分眠前薬の確認 ・ 受け持ちレイン別申し送り	・ 通路へ足元用ランタン設置 ・ 就寝支援 ・ 消灯準備 ・ 義歯洗浄確認 ・ 眠前薬配布	・ 洗濯支援 ・ 全館消灯	・ 翌朝洗面準備 ・ 館内用具消毒 ・ 2時間ずつ休憩	・ 水分補給・様子確認・体温測定 ・ SPO2・血圧測定(全員) ・ ランタン回収・身支度/整容 ・ 全館点灯	・ 新聞配布・手指消毒 ・ 食事テーブルへ誘導	・ 支援チーム内申し送り	・ DMAT訪室時申し送り・終業 ・ チームリーダーと統括リーダーとの申し送り

※DMAT…災害急性期に活動できる機動性を持ったトレーニングを受けた医療チーム

「災害派遣医療チーム Disaster Medical Assistance Team」の頭文字をとってDMAT（ディーマット）と呼ばれています。



避難している対象者は支援度に合わせてエリアが分かれ、利用率は変動的であり感染対応や隔離が必要な方は任務最後の夜にはおられませんでした。

「自分の身は自分で守ってください。感染対策は理解されていると判断します」
「担当していただくのは感染者と濃厚接触

者エリアです」との言葉に、感染対策や隔離体制が整っている福祉施設と異なる環境で「どの様に対応すれば良いのか」再考しました。罹患者を増やさない、全国の福祉施設などから参集している支援者への感染を防御し、任務終了後に持ち帰らない、との強固な気持ちを持ちながら感染対応エリアでは予防着スタイルを整え任務をおこないました。平素から感染予防と対応方法について学び、いかなる場においても実践できる必要性を痛感しました。コール設備がない深夜の避難場所で足音や「ちょっと、誰か来てえ」と呼ばれる声に耳をすませ、事故が起きぬ様にとの思いで責任と緊張感が常にありました。全国各地から派遣された職員の要望を支援に取り入れようとすれば、統制が執れるはずもなく「ここにはない用品の話をするよりも、ある物で工夫しながら支援するしかない」「昨日の支援を振り返るのではなく、常に前向きの思いを持つ」とこの様な会話を交わしていました。避難して来られる方の入れ替わりが常にあり、対応については「移動－歩行器 排泄－誘導 水分－とろみ」この様な文言が個々のブース出入口に書かれており、随時必要な支援をおこないました。夜間帯の支援である事から、レクリエーションなどをおこなう場面はありませんでしたが、起床されてから朝食までの時間にお話を聴き、ひとりでおられる方への声掛けを通して短時間でもお一人おひとりへの『寄り添い支援』を心掛けました。聖書にある「善きサマリア人のたとえ」の箇所が思い浮かびました。

災害は多様な物的・人的被害が生じます。被災された支援が必要な方も、慣れない環境の中で避難生活を強いられ、全国から来た初めて会う支援者と接することで不安を感じておられたと感じました。一期一会との言葉がありますが、救援物資の他に『こころの温かさ』をお届けできたのではないかと思います。今回の派遣により少しでもお役に立て、その機会を頂けたことに感謝いたします。



能登半島地震にかかる緊急募金をおこないました！

法人のご利用者・ご家族・職員にひろく呼びかけ、集まった募金を被害が大きいと思われる石川県珠洲市へ3月8日にお送りいたしました。

また、2023年度クリスマス献金からも、日本赤十字社へ能登半島地震災害義援金としてお送りしています。

募金額 958,881円 **クリスマス献金から 109,967円**

皆様の温かいところと共に届きますように。そして一日も早い復興をお祈り申し上げます。

新任理事のご紹介

2023年度から法人の理事体制が新しくなりました。少しご紹介が遅くなりましたが、お二人の方に新理事として着任いただきました。改めて自己紹介を兼ねて神戸聖隷の印象などを綴っていただきました。



横田 治郎 理事

社会福祉法人 陽気会 法人本部 医療連携室室長

私と神戸聖隷福祉事業団とのつながりは、今から27年前の神戸市育成課の係長時代に遡ります。当時は、初めて障がいの仕事に関わり、養護学校の卒業生の進路問題や福祉就労の場の確保に奔走していた感じでした。そのような中で印象に残っていることの一つに、神戸聖隷では各施設長から施設の運営状況のヒアリングの際、施設の経営状況も報告されていることでした。今では福祉施設においても、経営ということが当然のように語られますが、早くから取り組まれているその姿勢に感心いたしました。

神戸聖隷は障がい者福祉からスタートし、高齢者福祉へと支援を拡げられ、但馬地区、神戸地区それぞれの地で、事業を展開してこられた先人の培われた実績が、それぞれの地域で信頼を培ってこられたと思います。

神戸聖隷の取り組みのひとつである総合職員研修会に参加させていただき、各施設での実践報告を聞く中で、それぞれのご利用者様への支援に対し現場で課題を見出し、何度も議論を重ね解決に向けた報告を聞き、皆さんの熱意に感心しております。

また、各施設の運営状況について、経営状況だけでなく、施設運営についても施設長任せでなく、職員同士で効率的なシフトを検討したり様々な工夫をされ、一人一人が主体性を持って取り組んでおられることを聞き、職員の生き生きとされている様子を知らされ、神戸聖隷の人材の層の厚みを感じさせられます。

これからも、私たち福祉に関わる者として、福祉で働くことを通じて、その強みを活かして他の方々と一緒に課題に取り組み、高齢者も障がいのある方も安心して暮らせる街づくりを行っていきましょう。



飯塚 由美子 理事

社会福祉法人 三田谷治療教育院 常務理事

私は理事に就任させていただき、大変光栄に、そして大変嬉しく思っています。

何故ならば、理事会や評議員会に出席させていただく度に、役員の皆様のそれぞれのお仕事の立場からプロとしての的確なご意見を拝聴できるからです。私自身、経歴としましては、21歳から知的障害者入所授産施設に勤務し、その後、知的障害児入所施設に施設長として配属されました。その後、3歳から90歳までの知的障害の方の支援を経験しましたから、後は就学前の幼児を支援したいとの思いから現在の明石市立あおぞら園とゆりかご園に行かせいただきました。15歳の時にテレビで「びわこ学園」のドキュメントを観て以降、重症心身障害の方の支援をしたいと願っていたことが、今に繋がっています。そして、プライベートでは10年前からカンボジアにおいて障害児者支援を実施しています。その国際支援の関係で水野理事長にお会いすることが出来ました。

役員会の冒頭に理事長が聖書を引用されてお話をしてくださいませ。私はこのお話にいつも感動し、時には涙が出ることもあります。

私も小さな組織も含め理事長・代表という立場でもありますが、水野理事長の人としての優しさ、度量の大きさを見習おうと思います。又、研修会においても職員の皆様の学ぼうとする姿勢に心から敬意を表しています。

人の支援には終わりはなく、常に支援者は謙虚な姿勢で誠実に利用者に向き合うことが大切です。そして、自分自身が楽しんで仕事をするべきです。

神戸聖隷の職員の皆様には、常に学ぶ姿勢を持ち続けて、お仕事を頑張ってくださいと心から願います。

創業50周年記念に向けて ～「感謝と希望」～

創業50周年記念事業実行委員会報告

2025年6月22日の創業記念日をもって、神戸聖隷福祉事業団は創業50周年を迎えます。現在、記念事業実行委員会で50周年をどのように迎えるかの検討を始めました。

これから法人ホームページにも特設ページで随時報告をさせていただきますが、どのような内容を検討しているかをご報告します。

01 創業50周年記念礼拝 2025年6月21日(土) 西神戸教会(神戸市垂水区)

法人創設の礎となる西神戸教会で、礼拝(永眠者追悼)、永年勤続者表彰、記念講演を予定しています。

02 創業50周年記念式典 2025年10月17日(金) 舞子ビラ神戸(神戸市垂水区)

これまでお世話になった関係者・行政の方をはじめ、ご利用者・ご家族にも参加いただき50年の歩みを振り返り、未来へつながるひとときをしたいと計画しています。

記念礼拝、コンサートなどを予定しています。

03 記念ロゴとキャッチコピー

神戸聖隷のマスコットキャラクター「だいふく」をデザインに加えた記念ロゴとキャッチコピー「KOBESIREI NEXT50」を決定しました。キャッチコピーについては職員に公募し委員会の中で決定しました。記念ロゴはデザインを各施設で使用できるようにデータを配信しました。

04 記念グッズ(第1弾)

記念ロゴ入りポロシャツ
全役職員に10色から選んでもらい、記念ロゴをプリントした半袖ポロシャツを制作しました。この冊子が出来上がるころにはもう既に着用しているでしょう。



神戸聖生園 支援員 島田 晋弥

2023年度

事業報告

「今泣いている人々は、幸いである。あなたがたは笑うようになる。」

(ルカによる福音書6：21b)

社会福祉法人 神戸聖隷福祉事業団

理事長 水野雄二

1. はじめに

長く続くコロナ禍も2023年5月から感染分類が第2類から第5類に変更され、社会全体はウィズコロナへと大きくシフトチェンジしました。しかしながら、2023年度は、コロナウイルスの終息には及ばず、依然として感染症の影響を強く受けながら施設運営を続ける一年となりました。

神戸聖隷福祉事業団は、2023年度から2025年度までの3か年を第5期中期計画として、新しい組織体制の下で事業をスタートさせました。そのビジョンに「私たちは、今日までの歩みに誇りをもって地域社会・利用者・職員のしあわせを次の半世紀につないでいきます」を掲げ、来る2025年の創業50年に向かって活動を進めています。

また、中期計画の基本的な考え方を「計画の中心は施設計画である」とし、各施設が自己完結を目指し努力を重ねると共に、常任理事をグループサポーターとした応援協力体制を整え、施設それぞれの中期計画を完遂できるような動きを始めました。同時に、法人全体の推進役として「QOL委員会」「財務委員会」「人事委員会」「広報委員会」の4つの委員会が山積する法人課題に取り組み、「経営諮問委員会」では次代の経営層養成を意識した新たな委員を加えて、特に「人材の発掘と確保」を1年のテーマとして施策を採択し、実行に移してきました。

世界、日本、地域社会にあって、多くの人々が今なお、様々な状況の中で生きづらさや悲しみ、恐怖や不安を持ち続け、涙を流しておられます。しかし神戸聖隷では、コロナの収束によって開催された神戸での「第42回おいでやすカーニバル」に、また但馬での「感謝祭」に、多くのご利用者、地域の方々、職員らが集い、笑顔で一日を過ごすことができました。私たちは「笑うようになる」社会、施設、人間関係の構築をめざして更に歩みを継続していきます。

2. 第5期中期計画に基づく委員会報告

財務委員会

年度当初は年度目標の数値に近い状況で推移しましたが、6月以降、コロナによる入所施設でのクラスター発生があり、目標を達成するのが困難となりました。各施設でも定員割れとその後の空床補充が満たされず、他機関との連携も継続して実施しましたが利用者確保に繋がりませんでした。委員会では、利用人数、給付費収入の達成状況の把握に努め、各事業所への支援を通して加算取得により経営改善した事業もありました。また、職員の働き方について、労務管理やタイムマネジメントの研修を実施、働きやすい環境整備のための意識改革に努めました。

QOL委員会

サービスの質向上を目指して、法人財産とも言うべきキャリアのある職員により5分野（相談、就労、知的、児童、介護）のチームを立ち上げ、QOL専門研修計画を作成し、2024年度の実施へ繋げました。虐待防止チェックリストの実施や事例学習会を通して、虐待・不適切ケアへの理解を深めることができました。第三者評価、満足度調査も実施し、その対応はホームページに公表しています。また、先端技術などの情報収集を聖隷福祉事業団での学びを通して行いましたが、情報提供だけにとどまっており、その推進は今後の課題となっています。成年後見制度活用推進委員会の活動も継続することができました。

人事委員会

福祉人材の確保に向けて、学校訪問を17校行い、担当者だけでなく理事や施設長も分担し、法人全体の課題として認識を共有できました。「福祉の就職フェア」などにも、若い職員の派遣協力も得て取り組むことができました。しかしながら、新卒採用は昨年度よりは増加したものの予定数は達成できず、人材確保の厳しさは続いています。人材育成に関わる法人内研修は、各階層別研修の他、コロナで中断していたタイでの海外研修が4年ぶりに再開し、特に連携協定を結んでいる神戸常盤大学からの学生も加わり、参加者にとってはタイの人々の熱い「福祉のこころ」を学ぶ貴重な機会となりました。

広報委員会

地域公益活動は各地域で「ほっとかへんネット」に所属し、様々な活動を行うことができました。他法人との事業間交流や情報収集もでき、新しい連携体制が構築されました。新年早々の能登半島地震では、職員派遣要請があり、職員1名が現地に赴きました。関連して、法人のBCP（事業継続計画）策定が未着手で早々に取り組む課題となっています。神戸聖隷オアシス内の「Tunagari」では新しい機能として「子どもの居場所・学習支援と食事支援」を計画しており、3月にプレイベントを開催することができました。2024年度の夏休みから実施しており、地域交流の場としての一步を踏み出せました。法人広報紙として「職員報」「洗足」を発刊し、また法人ホームページのリニューアルに取り組みました。

3. 評議員・役員の変更

2023年4月開催の評議員選任・解任委員会で2名の新任の評議員が選任され、また6月開催の評議員会にて以下の重任及び新任の役員が選任されました。

<評議員（新任）>

上杉徹・長井慎吾

<評議員（任期継続中）>

稲松真人・今井和夫・尾堂拓哉・小谷則彰・津田耕一・津幡佳伸・中井雅治・水内孝司

<役員（重任及び新任）>

理事 水野雄二（理事会にて理事長に選任）・村山盛光（理事会にて常務理事に選任）・有川洋司（常任理事）・伊崎辰夫（常任理事）・久木田憲彦（常任理事）・吉本ひろみ（常任理事）・飯塚由美子（新・非常勤理事）・横田治郎（新・非常勤理事）

監事 藤本辰也・寺嶋英介・中田一夫・長石道雄（新）

2023年度

決算報告



2023年度決算について

法人本部 事務長 小紫 義也

2023年度のサービス活動収益は38億1100万円となり、対前年比でプラス5,064万円（+1.3%）の増収となりました。サービス活動費用は物価高騰や障害者相談支援事業の社会福祉法上取り扱いに基づく消費税修正等の影響を受けましたが、経常増減差額は4年ぶりにプラス（1.2%）となりました。設備整備に関しては、真生園において空調設備・特殊浴槽の更新を実施しました。

兵庫県社会福祉法人経営者協議会からの提言を受けて、当方も決算報告時に経営指標を確認するようにしています。その結果、事業の継続性に関しては問題ないと判断出来るものの、個別の事業については点検が必要になっていると認識しています。

昨年5月には新型コロナウイルスは感染症法上5類に移行しましたが、施設内の感染リスクが無くなったわけではなく感染症対策を継続しながらの事業運営となり、コロナ禍前のご利用状況に戻るにはまだ一定の時間を要すると考えています。また障害者支援施設においては入所を希望されるご利用者が減少し、空床になった後にすぐにご利用に繋がらない状態が生じて、延べ利用者人数も前年度を下回る結果となりました。法人経営について今後も厳しい状況は続くと思っておりますが、施設をご利用いただいている方々、地域の皆様に必要とされる法人であり続けるために、これからも努めて参ります。

貸借対照表 [令和6年3月31日現在]

(単位：千円)

資 産 の 部		負 債 の 部	
	当年度末		当年度末
流動資産	2,022,874	流動負債	335,576
現金預金	1,383,859	短期運営資金借入金	0
事業未収金	606,563	事業未払金	109,268
		1年以内返済予定設備資金借入金	22,664
		1年以内返済予定長期運営資金借入金	10,000
		賞与引当金	121,568
固定資産	5,786,179	固定負債	789,274
基本財産	2,743,464	設備資金借入金	198,948
土地	263,445	長期運営資金借入金	25,000
建物	2,480,018	退職給付引当金	546,445
その他の固定資産	3,042,715	負債の部合計	1,124,850
土地	113,167		
建物	143,003	純 資 産 の 部	
退職給付引当資産	328,446	基本金	946,256
積立資産	2,216,119	国庫補助金等特別積立金	787,180
		その他の積立金	2,216,119
		次期繰越活動増減差額	2,734,646
		(うち当期活動増減差額)	29,262
		純資産の部合計	6,684,203
資産の部合計	7,809,053	負債及び純資産の部合計	7,809,053

資金収支計算書〔自〕令和5年4月1日〔至〕令和6年3月31日

(単位：千円)

勘定科目	予算 (A)	決算 (B)
事業活動収入計 (1)	3,890,289	3,887,737
事業活動支出計 (2)	3,716,879	3,674,353
事業活動資金収支差額 (3) = (1) - (2)	173,409	213,384
施設整備等収入計 (4)	429	429
施設整備等支出計 (5)	41,903	41,747
施設整備等資金収支差額 (6) = (4) - (5)	-41,474	-41,318
その他の活動収入計 (7)	114,769	108,453
その他の活動支出計 (8)	243,966	243,501
その他の活動資金収支差額 (9) = (7) - (8)	-129,197	-135,047
予備費支出 (10)	0	0
当期資金収支差額合計 (11) = (3) + (6) + (9) - (10)	2,738	37,018
前期末支払資金残高 (12)	1,826,998	1,802,682
当期末支払資金残高 (11) + (12)	1,829,737	1,839,700

事業活動計算書〔自〕令和5年4月1日〔至〕令和6年3月31日

(単位：千円)

科目	当年度決算 (A)	前年度決算 (B)	増減 (A) - (B)
サービス活動収益 (1)	3,811,615	3,760,969	50,645
経常経費寄附金収益	32,121	19,031	13,089
サービス活動費用 (2)	3,848,327	3,786,323	62,004
人件費	2,743,215	2,713,458	29,757
事業費	405,808	429,394	-23,586
事務費	459,776	399,554	60,221
業務委託費 (保守料除く)	191,194	192,833	-1,639
減価償却費	254,358	265,700	-11,341
国庫補助金等特別積立金取崩額	-71,770	-74,187	2,416
サービス活動増減差額 (3) = (1) - (2)	-36,711	-25,353	-11,358
サービス活動外収益 (4)	97,445	48,628	48,817
サービス活動外費用 (5)	14,447	24,676	-10,228
サービス活動外増減差額 (6) = (4) - (5)	82,997	23,951	59,046
経常増減差額 (7) = (3) + (6)	46,286	-1,401	47,687
特別収益計 (8)	1,804	2,676	-872
特別費用計 (9)	18,827	2,451	16,376
特別増減差額 (10) = (8) - (9)	-17,023	224	-17,248
当期活動増減差額 (11) = (7) + (10)	29,262	-1,176	30,438
次期繰越活動増減差額	2,734,646	2,830,555	-95,908

参考資料	2023年度	2022年度
流動比率	602.8%	697.2%
純資産比率	85.6%	86.1%
人件費率	72.6%	72.8%
委託比率	5.1%	5.2%
人件費率 + 委託比率	77.6%	78.0%
固定長期適合率	77.4%	78.1%
経常活動収支差額率	1.2%	-0.0%
サービス活動収益対借入金比率	3.6%	3.4%
労働分配率	93.7%	95.5%

参考資料	2023年度	2022年度
サービス活動増減差額率	-0.96%	-0.67%
経常増減差額率	1.21%	-0.04%
借入金償還余裕率	17.65%	18.32%
債務償還年数	1.20年	1.43年
現預金回転期間 (月)	4.36月	4.15月
事業活動資金収支差額率	5.49%	5.41%
当期活動増減差額	29,262千円	-1,176千円
流動比率	602.81%	697.16%
固定長期適合率	77.42%	78.11%

法人第5期中期計画（2023～2025）「2024年度計画」について

第5期中期計画は施設運営の充実を第一のテーマとしていますが、各施設に共通する課題については、法人の中期計画として取り組みをすすめています。2024年度にあっては、下記の項目について重点的に取り組み、第5期中期計画の「私たちは、今日までの歩みに誇りをもって地域社会・利用者・職員のしあわせを次の半世紀につないでいきます」というビジョンの実現に尽力していきます。

常務理事 村山 盛光

1. 学習と成長の視点

実行計画	2024年度事業計画	目指す成果
管理職のワークライフバランスの向上	管理職を対象としたマネジメント研修の実施と管理職業務の見直し	▶管理職の超過勤務時間数対前年度10%削減
契約職員の休日数の検討	条件、メリット、デメリットの検討	▶契約職員就業規則を含む就業制度の改定
研修による人材育成の強化	・研修担当チームの編成 ・育成プランの検討と策定 ・実習担当者を対象とした研修の実施	▶チームの編成 ▶分野別育成プランの策定 ▶実習担当者の指導力向上
子育て・介護世代応援プランの策定	役職者を中心とした検討委員会の発足	▶子育て、介護世代に必要な支援内容の整理

2. 業務プロセスの視点

実行計画	2024年度事業計画	目指す成果
神戸愛生園の建替え	建替え案の検討	▶アメニティの向上と入所施設の役割の明確化
新たなGHの開設とセンター化の実現（神戸地区）	新たなGHの開設とセンター体制構築に向けた検討	▶センター化に向けての基本方針の決定 ▶GH開設候補地の決定
法人内BCPの作成（施設事業所間協力体制の構築）	災害時の法人内協力体制の構築	▶各施設BCPの内部連携を組み入れた更新 ▶神戸地区相互支援マニュアルの作成



3. 顧客の視点

実行計画	2024年度事業計画	目指す成果
一人ひとりに最適な支援の提供⇒神戸聖隷品質のサービス向上	QOL専門研修の実施	▶ QOL専門チームによる知識、技術を幅広く伝授
	サービスの評価と改善策の実施	▶ QOL向上に向けた取り組みへの評価と施設内PDCA体制の構築

4. 財務の視点

実行計画	2024年度事業計画	目指す成果
各施設の収支状況の分析と運営方針の検証	月次実績より課題を理事・施設長で情報共有	▶ 月次目標達成と課題の理解と共有
	経常増減差額率が低い施設の経営分析参考指標との比較による課題抽出	▶ 経営改善の方針決定
管理職時間外勤務への対応	管理職研修による意識改革、業務の見直し	▶ 管理職の意識改革 ▶ 超過勤務削減
70歳までの就業機会確保(努力義務)への対応	社労士の助言をもとに経営諮問委員会にて検討	▶ 基本方針の決定

5. 地域公益の視点

実行計画	2024年度事業計画	目指す成果
Tunagari、神戸聖隷総合相談センターの機能発揮	こどもの居場所・学習支援・食事支援を小学校の長期休暇に6回開催	▶ Tunagari、神戸聖隷総合相談センターの存在周知と潜在的課題への対応
自然災害時等の対外協力活動体制の構築	各施設の対外協力活動体制の構築(年度毎の派遣要員の選定)及び随時更新と情報共有	▶ 自然災害発生時において即時対応可能な体制構築



Tunagari ~こどもひろば~

開催しました!

2024年度から、神戸聖隷オアシス1階の「Tunagariあつまり処」を活用し、小学生・幼児（保護者付き添い）の居場所として「Tunagari ~こどもひろば~」を始めました。

小学校の長期休暇の日中の時間帯に年6回開催し、気軽に集ってもらい、学校の宿題などの「学習支援」と、昼食提供（こどもは無料）の「食事支援」をおこないます。近隣の須磨友が丘高等学校や啓明学院高等学校の生徒さんにもボランティアとしてお手伝いいただき、一緒に勉強したり遊んだり「こどもの居場所」となるように計画しています。

今年の3月（春休み）にはまずは場所を知ってもらおうと、「プレイベント」を開催し、多くの小学生や保護者の参加があり楽しい時間を提供できました。

本誌では今年度第1回夏休み期間（7月23日（火））に開催した様子を報告します。

当日は夏休みに入ったばかりの元気な小学生（1年生から6年生）25名の参加がありました。10時半から開催し、プレイベントのような遊びはなく、大丈夫かなと心配しましたが、こどもたちは懸命に学生ボランティア10名と持参した宿題に取り組んでいました。

途中にブレイクタイムでアイスクャンディーを食べて、12時までボランティアのお姉さんやお兄さんと勉強をしたり、楽しくお話をして過ごしました。その後、特製カレーライスのランチタイムでおかわり希望が続々と！次回の開催日（8月7日）にはもう宿題が終わっているかもしれませんね。暑い中「楽しかったよ ありがとう」と笑顔で帰っていくこどもたちに元気をもらいました。ボランティアの学生の皆さんもありがとうございました。（広報委員会 吉本ひろみ）



のぼりを立てて
お出迎え

Tunagari ~こどもひろば~
7月23日（火）

- 10:30~11:15 べんきょうのじかん
- 11:15~11:25 ひとやすみ（おやつタイム）
- 11:25~12:00 べんきょうのじかん
- 12:00~13:00 ひるごはん

新施設長・課長紹介



和生園施設長
山根 由夫

但馬地区の和生園で、この4月から施設長を務めさせていただいています。施設長という大きな役割と責任を背中に背負いながら、自分が果たすべき職責は何なのか…と思案しつつ、時折、「つとめいそしめ 花のうへの…」と心の中で讃美し、励まされながら、職務に当たっている毎日です。

神戸聖隷福祉事業団に入職し、ご高齢の方の介護業務、障害のある方の生活支援に携わせていただき、今年で33年が経過いたしました。現在の和生園には2016年4月から勤務しており、9年目を迎えました。この間、ご利用者の高齢化による身体機能の低下、提供している作業も時代の流れと共に変化し、朝来市内における就労支援施設の状況など、ご利用者を取り囲む環境は大きく様変わりし、現在も変化し続けています。

和生園は、障害のある方が、少しでも沢山の工賃を稼いでいただける施設であり続けることを堅持しながらも、地域の状況や利用ニーズを把握しながら、5年後、10年後の和生園の果たすべき役割を模索して参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。



真生園施設長
近藤 咲美

4月から朝来市にあります障害者支援施設真生園の施設長を務めさせていただくこととなりました。随分前に新卒で当法人に入職し、出産を機に一旦は退職、その後2003年に再びお世話になってから、但馬地区の障害者施設や高齢者施設を経験させていただき現在に至っております。中でも真生園での勤務が一番長く、たくさんのご利用者や職員と出会い、思い出の詰まった大切な施設で、大きな役割を与えていただきましたことに戸惑いを感じながらも、恩返しの思いも込めて一生懸命に取り組みたいという決意も生まれてきているところです。今後もご利用者と職員が笑顔で生き生きと生活できる場であり続けられるように、微力ながら貢献していきたいと思っております。ご支援のほどよろしくお願いいたします。



恵生園支援課長
藤原 万貴子

今年度から恵生園の支援課長を務めさせていただくことになりました。恵生園では支援課主任として5年間勤務をいたしました。また4月からいつもの職場、気心が知れた職員と一緒に働くことができ、緊張することなく年度を開始することができました。しかし、もちろん今までと同じというわけにはいきません。課長としての責任、しなければいけない業務や会議などが増え、主任とは違う視点で恵生園に関わっていく必要性が出てきました。まだまだ未熟なところがあり、まわりに迷惑をかける事もあるかも知れませんが、恵生園をより良い施設にするために、そして、ご利用者も職員も笑顔で過ごし、笑顔で働ける施設にするために頑張っていきたいと思っております。

神戸聖隷にご寄付をいただきました。

(敬称略・順不同)

6月

藤津恒難水植岡田藤野大小豊平植永濱金澤米松西内北須藤印地自治会会長
 本幡田波野戸田島井口谷西田田田島田原田井内勝太郎
 辰佳康公雄貴安津啓康正和節克君明映義英成一勝太郎
 也伸子枝二子子啓雄泉子彦操昇恵美子正子己恵子尚裕正リ芙佐子恒

4月

3月

2月

皆様のご支援に
 感謝申し上げます。

ご寄付のお願い

利用者(障害(児)者・高齢者)の一層のサービス向上に資するため、法人は皆様のご寄付をお願い申し上げます。同封の振替用紙をご利用ください。



牧師

Message

真のリーダーシップとは

垂水福音教会 牧師 松下 勝彦

聖書の中に主イエス・キリストが弟子たちの足をたらいに水を入れて、腰にまとっていた手拭いでふき始められたことが記されています。

主である方が弟子たちの足を洗うということは弟子たちも驚いたと思います。

皆様はここをどう思われますか。

この「洗足」誌はこの箇所から誌名を付けられたのでしょうか。

ここに主イエス・キリストはサーバントリーダーの姿を見せておられます。

主イエス様は「仕えられるために来たのではなく、仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのと、同じようにしなさい。」マタイによる福音書 20:28と、誰が弟子たちの内で一番偉いかと論議していた時に言われています。

私の母のことで恐縮ですが、一つ、紹介させていただきます。

母は40代でキリスト教信者になりました。八十を過ぎた姑がいて、寝たきりの生活でした。今のような介護施設も少なく、家で介護をしていました。食事の世話から下の世話まで事あるごとに母は世話をしておりました。夜中にも呼ば

れて世話をしますが、いつもいつも気持ちよく世話が出来ず疲れてしまいました。もう無理と思いが爆発しそうになった時、母は「イエス様。助けてください。もう自分ではどうにもなりません」と叫んだそうです。

その時から。今までは、してやっていると思っていたのが、そうではなく、させてもらっていたんだという思いが不思議と心に来たというのです。その後、平安の内に世話をすることができ、姑も平安に過ごすことができました。

イエス・キリストは仕えられるために来たのではなく、仕えるために来たと言われ、弟子たちの足を洗われました。それを模範とするようにと教えられましたが、教えられるだけでなくそれが出来る力も与えて下さることをお互いに覚えたいものです。

